

令和7年度 矢作川自然再生検討会 議事概要

重要種に関わる情報については、
原則非公開とさせていただきます。

日時：令和8年2月5日（木）13:00～15:30

会場：豊田市職員会館2階 第一会議室

1. 開会

2. 挨拶（豊橋河川事務所 事務所長）

3. 議事

(1) 矢作川自然再生検討会規約（改正）

矢作川自然再生検討会規約の改正（構成員の追加）について事務局より説明し、承認を得た。

(2) 前回検討会 意見対応

事務局より説明。意見等はなし。

(3) 令和7年度モニタリング結果（干潟、ヨシ原）

事務局より説明。委員からの主な意見は以下の通り。

<干潟>

- ・(P18、19)シギ・チドリ類は、愛知県の調査でも近年ほとんど見られない。令和7年はカモ類もほとんど見られない状況。矢作川や三河湾の貧栄養化に伴い、様々な生物が減少しているように思う。一色干潟のアサリの漁獲も減っている状況にある。干潟の造成も重要であるが、栄養塩の減少も含めて、総合的に対策を考えていく必要があると感じる。
- ・貧栄養化については、水産業界でも問題視されており、三河湾の窒素、リンの排水規制の緩和に向けて環境省等に働きかけている。(P19) 河口部左岸でシギ・チドリ類の確認が多かったことについては、矢作川浄化センターで冬季に実施している、窒素・リンの増加放流の効果ではないか。
- ・水産試験場の研究では、干潟に植物プランクトンを添加することで、濾過食性の底生生物が増加することが確認されている。豊かな干潟を取り戻すには、植物プランクトンの増加が必要と考える。かつては海域の富栄養化が問題となり、水質浄化が課題であったが、現在の矢作川は水質浄化が必要な状況ではないと感じる。
- ・昨今の生物の減少が、過度な水質浄化によるものか、別の問題によるものかについては、考えていく必要があると感じる。干潟の面積は、明治・大正時代と比べて10分の1以下になっており、干潟そのものの消失も生物減少の一因だと考えられる。
→水質の問題については、栄養塩の排水規制の緩和等により、対策が進められている状況にある。一方、干潟の物理環境の改善は不十分であり、水質改善の効力が発揮される場として、干潟の回復が必要と考えている。今後は、場の回復と水質の豊かさの回復の相乗効果により、自然再生事業が機能していくのかモニタリングしていくことが重要と認識している。(事務局)

<ヨシ原>

- ・(P11)河道の工事にあたっては、一様に掘削するのではなく、水の流れを調整してワンド環境を維持できると良い。例えば、令和4年度施工区のように、下流側に開口部があるワンドが理想的なのではないか。ワンド内部も浅いため、子供が水遊びしている状況が見られ、印象的であった。
- ・令和4年度施工区のワンドが維持されるか否かは、開口部の地形変化に大きく影響されると考えられるが、ワンドの接続先が二次流路のため、地形変化の予測が難しい。ワンドの設計としては、本川に対して下流側で接続させる形が理想的と考えられる。
- ・(P17)一度ヤナギ類が侵入すると駆除は難しいと思われる。令和元年度の樹木伐開時に伐根は実施しているか。
→盤下げとあわせて、伐根も実施している。(事務局)
- ・試験施工を実施した平成22年度施工区では、盤下げの地盤高がT.P.0.8mの場合ヤナギ類が再繁茂しやすいことが、これまでのモニタリングで分かっている。現在は、T.P.0.5mを基準に、施工箇所に応じて調整している状況である。
- ・(P23) [] については、現地調査を実施した際に、大型の個体を多数確認しており、二枚貝類に産卵するタナゴ類にとっても良い環境になるのではないかと考えられる。
- ・令和4年度施工区のワンドでは、満潮時に岸側や上流側に水が浸透し、干潮時に冷たい地下水として湧出するサイクルが生じている。地下水は高温の表層水と混ざりながら、中温となって本川に向かって流れている。

(4) 自然再生計画の現状と今後の対応方針

事務局より説明。委員からの主な意見は以下の通り。

<干潟再生>

- ・(P4)昭和40年から昭和60年にかけての干潟減少の要因は何か。
→砂利採取や、上流域でのダム群建設等の要因が複合的に作用した結果と考えている。(事務局)
- ・(P9)土砂供給によって河川内だけではなく海側にも砂が流れている。干潟のモニタリングにあたっては、航空写真やレーザー測量でも良いので、可能であれば管理区間より下流の状況も監視することが望ましい。また、施工区間については、自然砂州が周期的に変動する状況下にあり、現状のモニタリングを継続することで良いと考える。
- ・(P10)三河湾の環境への懸念とあるが、具体的にどのようなことが懸念されるのか掘り下げて考えるべきである。矢作川は、本来、上流域から下流と海域に砂を運ぶことで、河口域の豊かな環境を形成しており、その機能は否定されるものではないと思う。
- ・大規模出水によるシルトの堆積が懸念される。干潟造成が直接的な原因ではないと考えられるが、シルト・粘土の流出も加味しながら事業を計画してもらいたい。

<ヨシ原再生>

- ・(P15)ヨシ原再生において、川幅の広い区間では、一様に掘削をすることで砂州が再形成され、植生の繁茂と陸地化が進みやすい状態になる可能性がある。場合によっては、維持管理の一環として試験的に片岸だけを掘削してみても良いと考える。今後は、河道管理の中で自然再生をどのように位置づけるか考えていく必要がある。

- ・家下川でボランティア活動を行っているが、近年、植生がヨシ原から芝のような草本へと変化しているように感じる。家下川ではモニタリング調査等は実施されていないので、専門家の意見をうかがえるとありがたい。
- ・矢作川研究所では、地域の課題に応じて助言等の協力が可能であるので、適宜問合せてもらえれば良い。

<共通>

- ・干潟、ヨシ原ともに矢作川の砂河川の特徴から、土砂が非常に動きやすいため、今後の事業においても治水面も含めて河道を監視しながら、環境にも有益となるような事業展開を検討していく。ヨシ原再生では、今後右岸側の施工も検討していきたい。(事務局)

4. その他

令和8年度ヨシ植え体験会開催の予定について事務局より説明した。

5. 閉会

以 上